ちょっとひと言

リスク対応の基本

「割れ窓理論」に学ぶ

ARMS代表
リスクアドバイザー
赤堀 三代治

JA静岡経済連にて、畜産部門、企画管理、総務、情報システム、監査、コンプライアンス等の要職を歴任。定年退職後、ARMS(アカホリリスクマネジメントシステム)を主宰、全国各地でコンプライアンスやリスク管理をテーマにした研修、講演、コンサルティングを行う。2014年6月からJAしみず理事。

小さなリスクを見逃すとやがて大きなトラブルにつながる!!

リスク管理の視点から、3つのキーワード

①「割れ窓理論」
②「ハインリッヒの法則」
③「優勢反応の理論」

をもとに、3回に分けて記述します。

今号では、①「割れ窓理論」を紹介します。

割れ窓理論とは、「1枚の割れた窓ガラスをそのままにしておくと、やがて街全体が荒れて犯罪が増える。だからたった1枚のガラスでも割れたらすぐに修繕しよう」という犯罪予防理論(米国ジョージ・ケリング博士が考案)で、小さな犯罪を放置すると、やがてそれが大きな犯罪につながるという犯罪心理学の理論としてよく知られています。

1990年代、治安の悪化した米・ニューヨーク市で、当時のジュリアーニ市長はケリング博士を顧問とし、この理論を応用しての治安対策に乗り出しました。そして、地下鉄の落書き取り締まりなど軽微な犯罪に徹底して取り組むことで、殺人などの重大犯罪の削減に成功、治安を回復させました。

ニューヨークは、安全・安心な世界に誇る都市として再生されたことで、この理論は、注目を浴びるようになりました。

「割れ窓」は組織の状態を映す鏡。「問題行動」は見逃すな!!

この理論は、JA組織の運営や農業経営の場でも応用できます。小さなほころびは、やがて大きな被害をもたらすリスクを秘めていることの警鐘です。

「ゴミが落ちていても拾わない」「整理整頓ができていない」「服装が乱れている」「あいさつがきちっとできない」などの行動が、いつしか組織に大きなリスクをもたらします。

逆に、小さな課題や基本動作について丁寧な取り組みを続けることで、結果として大きなリスクは回避されます。日々の基本動作の徹底が、リスク管理上、いかに大切か、再認識しましょう。